

港北ニュータウン見学会

東京農業大学
地域環境科学部 造園科学科
堀田 李子



センター北駅に10時に集合し徒歩10分程度の場所にある大塚・歳勝土遺跡公園に向かいました。

まずは公園内の都築民家園にて、事務局長の木村さんにお話を伺いました。都築民家園は江戸時代中期に建てられたもので、港北ニュータウン開発の際、移築、復元されたそうです。江戸時代この場所では、自給自足に近い農業が営まれており、大きな主屋はみんなが寄り集まる場所として利用されていました。この場所を管理するうえで心掛けていることは、「全てを業者に依頼するのではなく、気がついたものは自分たちでなおすこと」と教えていただきました。



木村さんにお話を聞いている様子。後ろに映っているのは民家園の馬屋。実際には馬ではなく、扱いやすく帰巢本能を持つ牛を飼っていたそうです。





母屋の中の様子。奥では生け花教室が開催されていました。茶道や手打ちそば講習会、みそづくり講座など様々なイベントの場として、日常的に活用されているそうです。

次に、港北ニュータウン緑の会代表の永田さんと合流し公園内の見学に向かいました。



港北ニュータウン緑の会は、公園の見廻りや竹林の整備などの定例作業に加え、タケノコ掘りや雑木林の下草刈り、ロープワーク講座、チェーンソーや刈払機の安全講習など多岐にわたる活動をされています。



公園内の竹林を見て回りました。竹林は生い茂りやすいため、奥が見通せるくらいの密度を目指して日々管理を行っているそうです。

広がりすぎてしまった竹林を雑木林に転換する活動も行っています。

木が増えることで鳥が集まるようになり、野草が生えるようになりそうです。整備により日の光が入るようになるとキンランやギンランなどの珍しい植物も現れるようになりました。



(左：雑木林の様子。地面に光が届きやすくなり野草が生えてきています。)

(右：竹林伐採後に植樹を行ったエリア。)

また、竹林→雑木林に変化していく様子を見るために 10m×10mの区画で植生調査を行っています。はじめは外来種が多いですが、5年ほど経つと在来種が現れ始めるとのことです。

都築民家園の見学や永田さんのお話を通して、自分たちで心地よい空間をつくろうとする姿勢は今も昔も変わることなく続いていると実感しました。完璧を目指しすぎない活動の姿勢や、余白をもたせ多様な活動スタイルを受け入れることが、長期的に活動を続け、コミュニティを作っていくうえで大切なことだと感じました。

緑地の管理の仕方や、ボランティアとして活動を続けていくための考え方など様々な点で勉強になりました。